

トゥールーズ安全対策連絡協議会

平成26年10月11日（土）

於ミディ・ピレネー仏日協会

<協議会用レジュメ及び議事録>

1. 当地治安情勢等についての説明

- (1) 緊急事態に向けての当館取り組みと、皆様へのお願い
- (2) 当地テロ情勢
- (3) 一般犯罪発生状況：報道、邦人被害と事例検討
- (4) 疫病関係：エボラ出血熱について

2. 出席者の皆様との情報交換、今後の治安対策に関する意見交換

(当日出席できなかった方からの情報提供等を含む)

<緊急事態に向けての当館取り組みと、皆様へのお願い>

1. 在留邦人が巻き込まれた、最近の海外重大事件等

- (1) 昨年1月16日にアルジェリアのイナメナスで発生した人質事件により、8カ国37名、日本人技術者10名の尊い命が奪われる事態となった。
- (2) 昨年9月9日、トルコ中部カッパドキアで日本人観光客の新潟大学の女子大生2人が刃物で刺され、一人が死亡、もう一人が重傷を負った。後日、犯人は逮捕され終身刑となった。
- (3) 昨年9月27日、スイス南部バレー州の山岳地サースフェー山中の氷河で行方不明になっていた奈良県出身の男性の遺体が発見された。散策中に氷河に落下したと見られる。
- (4) 昨年10月28日、ニュージーランド北島の西部にあるタラナキ山悪天候のため雪洞の中で身動きが取れなくなった日本人男性とニュージーランド人の計2人が死亡した。
- (5) 昨年11月8日、フィリピン中部のビサヤ地方に台風30号が直撃し、6,000人以上が犠牲になった。11月30日までに、同地域に住む在留邦人133人の安否確認がなされた。日本政府は11月12日に菅官房長官から1,000万ドルの緊急支援を表明している。
- (6) 本年2月14日、インドネシア・バリ島沖でダイビング中に日本人女性7人が行方不明となった。事件後72時間後までに5人が救助され、その後2人の死亡が確認された。
- (7) 4月28日、フィリピン・ルソン島で、日本人男性が現金を奪われて殺害される事件があった。その後、フィリピン人の男3人を逮捕された。
- (8) 7月2日、米自治領サイパン島を旅行中であった、日本人姉妹が、夜中に海水浴に出掛け水難事故に遭った。その後地元警察による捜査は打ち切られた。
- (9) 7月27日タイ中部で、シンガポールからタイの首都バンコクに向かっていたイースタン&オリエンタル・エクスプレスの列車が脱線し、日本人の乗客2人が首や足に軽傷を負った。26日に大雨が降り、地盤がゆるんでいたとの情報がある。
- (10) 8月21日、米カリフォルニア州オーシャンサイド市の高速道路で21日夜、日本人学生8人が乗った乗用車（定員4人）が、車線変更でバランスを崩し電柱に衝突し、3人が死亡、5人が重軽傷を負った。
- (11) 8月25日、フィリピン・マニラ近郊で、同地在住の日本人男性（66）がバイクに乗った2人組の男に射殺された。2人は逃走し、警察が捜査している。
- (12) 8月16日、内戦が続くシリア北部で日本人1名がイスラム過激派組織「イラクとレバントのイスラム国（I S I L）」に拘束された。日本政府は、在シリア日本大使館をはじめとする在外公館を通じて、現在も解放に向けて交渉が続いている。

2. 当館の取り組み

南仏においても、テロや自然災害が起こり得るリスクとして挙げられますが、これらは現時点で明示的脅威には至っておりません。他方、こういった事象は前兆なく突如発生する可能性が高いため、日頃からの入念な準備が必要と考えます。

当館では、いつ何時緊急事態が発生しても邦人援護のため即時対応できるよう、以

下に重点を置いて業務を推進して参ります。

- ・治安に関する情報の収集・分析
- ・在留邦人情報の把握と更新（安否確認時に必須）
- ・日系企業、邦人団体との連携強化

3. 在留邦人の皆様へのお願い事項

上記2. にて在留邦人の皆様の安全対策に関する当館取り組みをご説明しましたが、この取り組みは皆様のご協力なしには達成できません。本趣旨をご理解の上、特に以下事項につきご協力頂きますよう、よろしくお願ひします。

- ・在留届情報の更新（特に住所、電話番号、メールアドレス）
- ・メールマガジン登録
- ・治安関連情報（噂や「兆し」でも結構です）入手の際の、当館への情報提供（当館にて、頂戴した情報の真偽及び詳細につき確認作業を行います）

<在マルセイユ日本国総領事館の連絡先>

メール：cgm8@my.mofa.go.jp

電話：04 91 16 81 81

（受付時間 9：00～12：30、13：45～17：00）

※受付時間外の場合でも、緊急連絡事項がございましたら当館電話番号までご連絡願ひます（委託会社経由で領事担当官が当該事態を把握します）。

<当地テロ情勢>

イスラム過激派組織による脅迫メッセージ発出に伴う注意喚起

- 1 9月22日（日本時間）、シリア・イラクにおいて活動するイスラム過激派武装組織イラクとレバントのイスラム国（I S I L）は、米国を始めとする「連合」によるI S I Lへの攻撃を批判するとともに、欧州、米国、豪州、カナダ、モロッコ、アルジェリア、ホラサーン（注：アフガニスタン等の地域の旧称）、コーカサス、イラン等世界の（スンニ派）イスラム教徒に対して、米国、フランス、オーストラリア、カナダを始めとする対I S I L連合諸国の国民を軍人、民間人問わず攻撃するよう扇動する声明を発出しました。
- 2 また、上記声明の後、アルジェリアでは、I S I Lへの支持を表明しているイスラム過激派武装組織が、拉致したフランス人の解放と引き替えにI S I Lに対する軍事作戦を停止するよう、仏政府に要求し（9月24日付けスポット情報「アルジェリア：イスラム過激派武装組織による仏人誘拐事件の発生に関する注意喚起」参照）、その後殺害しました。更に、報道によれば、23日フィリピンにおいて、別のイスラム過激派武装組織が、身代金を支払うとともに米国への支援をやめなければ人質のドイツ人を殺害する旨、独政府に警告しました。
- 3 こうした中、アラブ5か国と共にシリア内のI S I L等の拠点に対して空爆を開始した米国政府は、上記も踏まえ、アルジェリア、ヨルダン、レバノン、トルコ、サウジアラビア及びフランスの自国民に対する注意喚起を発出しています。
- 4 つきましては、以上の状況に十分注意し、テロ事件や不測の事態に巻き込まれることのないよう、最新の関連情報の入手に努めてください。公共の場所に滞在する際や交通機関利用時には周囲の状況に注意を払い、不審な状況を察知したら、速やかにその場を離れるなど安全確保に十分注意を払ってください。
- 5 テロ対策に関しては、以下も併せて御参照ください。
 - (1) パンフレット「海外へ進出する日本人・企業のための爆弾テロ対策 Q&A」
 - (2) パンフレット「海外旅行のテロ・誘拐対策」
(<http://www.anzen.mofa.go.jp/pamph/pamph.html> に掲載。)

トゥールーズ周辺におけるテロ事件発生状況

1. トゥールーズ発生、「モハメッド・メラ事件」

- (1) 平成24年3月11日、トゥールーズ市内で仏陸軍空挺部隊所属の北アフリカ系仏人男性（非番、私服着用）が、男1名にけん銃で撃たれ殺害された。目撃情報によると、犯人は被害者に対して「おまえは俺の兄弟達を殺害した。今度は俺がお前を殺してやる。」と言ってから引き金を引いたとのこと。
- (2) 3月15日、モントーバンにて同じく仏陸軍空挺部隊所属の仏人兵士3名が男1名に銃撃され、2名が死亡した。犯人はオートバイで逃走する際、「アッラーは偉大なり。」と叫んでいたとのこと。死亡した2名は北アフリカ系、重傷者は海外県出身の黒人であった。
- (3) 3月19日、トゥールーズ市内のユダヤ系学校の前で男が発砲し、同校教諭1名を殺害、さらに学校内に押し入り逃げる児童に発砲し3名を殺害、1名に重傷を負わせた。
- (4) 一連の事件を同一人物による犯行とみて捜査を進めた警察が、モハメッド・メラを犯人と特定し3月21日未明に同人が立て籠もったアパートを包囲した。仏国家警察特別介入隊により犯人との交渉が続けられたが、結局交渉は決裂し、同日夜に突入作戦が決行された。アパート内での銃撃戦の末、犯人は射殺された。
翌3月22日、アルカイダ系を名乗る組織がインターネット上で犯行声明を出した。

2. 聖戦士となったトゥールーズ在住仏人の戦死

平成25年6月、トゥールーズ在住のフランス人青年がシリアで死亡した。彼は兄の影響を受けジハードイストとなり、「聖戦」で戦死した。翌7月には兄のメッセージがインターネット上で公開され、「弟が聖戦士になったのはアラーの神からの贈り物だ。仏大統領よ、お前もイスラムの世界へ来ないか。マリから仏軍を撤退させ、イスラムと戦うのをやめろ。」と訴えた。

3. トゥールーズ在住、聖戦志願少年の帰国

本年1月6日、15歳の少年2人がイスラム原理主義集団に合流するためフランスを出国しトルコ経由でシリア入りした。当時、約400名のフランス人がイスラム原理主義集団に所属しているとみられていた。

なお、この2名の少年は1月末にそれぞれフランスに帰国しており、治安当局の取り調べに対し、「人道活動に参加すべくシリアへ行ったが実態は兵士として呼ばれたことを知り帰国を決意した」と供述している。

4. トゥールーズ発生、モハメッド・メラ実姉の失踪

5月、内務相はモハメッド・メラの姉がトゥールーズから姿を消し、現在シリアにいるであろう旨述べた。内相の説明によると、この姉は9日にバルセロナ発イスタンブール行航空機に搭乗したことが確認されており、その後イスタンブール発ガズィアン

テップ（トルコ南東の都市）行航空機に乗ったがその後行方が分からなくなった由。この姉は、メラ以上に危険な人物として当局にマークされており、聖戦に参加するため既にシリア入りしている夫の下に向かったとみられている。パリ検察庁テロ対策部はテロ活動に関連する犯罪結社容疑で同女の予審を開始した。

5. アルビにおける、聖戦リクルーターの検挙

7月22日、アルビで「暴力的行動」を準備し、シリア聖戦に参加する兵士を募っていたとみられる男2名と女1名が拘束された。この3名はジハーディスト細胞及びモハメッド・メラを引き寄せたトゥールーズのイスラム主義運動に属すると疑われており、アルビ及びトゥールーズを中心に活動していた。

<一般犯罪発生状況>

トゥールーズ周辺発生、最近の犯罪（被害）報道 （当館把握分のみ）

●テロ、暴動

前述のとおり

●殺人

（１）トゥールーズ発生、過去の因縁が原因とみられる殺人事件

9月7日早朝、ペリゴール通り上で21歳の男性が刃物で大腿部等を数回刺され、搬送先の病院で亡くなった。犯人は過去にナイトクラブ内で被害者と喧嘩を起こした男であった。

（２）トゥールーズ周辺発生、対立抗争とみられる殺人事件（2件）

8月16日、トゥールーズ近郊のボーゼルにて、29歳男性が自宅前で何者かの銃撃を受けて殺害された。被害者は以前殺人未遂容疑で逮捕された（証拠不十分で釈放）ことのある者であった。

17日にはトゥールーズ市内ミライユ地区で24歳男性が殺害された。この被害者にも犯罪集団所属・麻薬取引等の犯歴があった。

トゥールーズ周辺では昨年12月から麻薬密売関連での報復により4名が殺害されており、捜査関係者は同市のマルセイユ化を懸念している。

（３）アルピ発生、小学校父兄による教師殺害事件

7月4日朝方、小学校の教師が、自分が担任をしている女兒の母親に刺殺された。事件発生当時は始業時間前で、大勢の児童が見ていた中での凶行であった。犯人の女性は即日逮捕されたが、同女に精神疾患があることから責任能力の有無が裁判の争点となるとみられている。

●薬物

（１）トゥールーズ郊外発生、「ゴー・ファスト」業者の逮捕

8月8日昼頃、警察はトゥールーズ方面に車を走らせていた男3名に対する職務質問を実施し、車内から大麻300kg以上を発見・押収した。この男らは「ゴー・ファスト」と呼ばれる麻薬の運び屋を営んでおり、その場で逮捕された。

南仏発生、最近の邦人犯罪被害例

1. はじめに

どんなに用心していても、犯罪被害を完全に防ぐ術はありません。観光地の泥棒は手慣れているので尚更です。残念ながら被害に遭ってしまった場合は、自分を責めることなく被害の悪化を防ぐべく直ちに次善策を講じましょう。

2. 邦人被害例

(1) 平成25年6月アルル郊外発生、「ゴッホの跳ね橋」での強盗被害

被害者：邦人旅行者2夫婦

状況：昼頃、「ゴッホの跳ね橋」観光にやって来た邦人2カップルがけん銃と刃物を持った男3名（うち1名は運転担当）に脅され、持ち物を全て奪われた。犯人の去り際に被害者の1名が犯人を追いかけたところ、けん銃で頭を殴られて負傷した。なお、この犯人は7月に逮捕済。

対策：・けん銃を突きつけられる等逃げるのが困難な場合、財物は放棄する他ありません。決して抵抗しないで下さい。命を守ることが最優先です。
・可能であれば、犯人の特徴や使用車両など事後捜査に役立つ情報をよく覚えておいて下さい。

(2) 平成25年7月トゥールーズ発生、ひったくり被害

被害者：女性旅行者（仏国内在住）

状況：予約していたホテルを探しミライユ大学周辺をうろうろしていたところ、2人乗りバイクの男らにつけ回され、声を掛けられた後にスーツケースを倒され、スーツケースの上に引っ掛けていたバッグを盗まれた。

対策：この被害の場合、対策の施しようがないかもしれませんが。ホテルをすぐ見つけられれば狙われることもなかったでしょうが。大きな荷物を持って移動している最中は、いつも以上に注意が必要です。貴重品は肩に掛けておいた方が良かったとは思いますが、一度犯人に狙われてしまっは難しいでしょう（バッグごとバイクで引きずられる恐れもあります）。

(3) 平成25年11月トゥールーズ発生、カフェ内での置き引き被害

被害者：在留邦人女性

状況：夕刻、在留邦人3名でカフェにいたところ、隣の席に座ってきた2人組の男が隙を見て邦人女性のバッグのジッパーが開けてカード入れを窃取。ジッパーが開いていることを不審に思った被害者の様子に気づき、男1人が逃げるように退店。店員立ち会いでもう1人の持ち物検査をさせてもらうもカード入れは見つからなかった。

可能性：被害者はカフェ入店前にスーパーで買い物をしており、その際カードを使用したことから、犯人に暗証番号を覗き見られその後カフェまで尾行された可能性もある。

- 対 策：・銀行カード等使用時は暗証番号を盗み見られないよう細心の注意を。
・不自然に近寄ってくる人間に要注意。貴重品は常に目の届く場所へ。
・被害拡大防止のため、盗難被害に気付いたらカード類は即時凍結。

3. 旅行者被害の典型（事前知識があれば防ぐことのできる被害が多い）

（1）すり、置き引き

（2）乗車中の車内からのひったくり

特にレンタカー利用者が狙われやすい。空港から市内へ向かう途中の路上や渋滞での信号待ち、車を降りた直後のドアロック解除時を狙って車内に置いてあるバッグを奪われるケースが多発している。

<疫病関係>

エボラ出血熱について

エボラ出血熱は、エボラウイルスが引き起こす、致死率が非常に高い極めて危険な感染症です。

患者の血液、分泌物、排泄物などに直接接触した際、皮膚の傷口などからウイルスが侵入することで感染します。感染の拡大は、家族や医療従事者が患者を看護する際、あるいは葬儀の際に遺体に接することで引き起こされる旨報告されています。

予防のためのワクチンは存在せず、治療は対症療法のみとなります。潜伏期間は2日から21日（通常は7日程度）で、発熱・悪寒・頭痛・筋肉痛・食欲不振などに始まり、嘔吐・下痢・腹痛などの症状があります。さらに悪化すると、皮膚や口腔・鼻腔・消化管など全身に出血傾向がみられ、死に至ります。

エボラウイルスの感染力は必ずしも強くないため、アルコール消毒や石鹸などを使用した十分な手洗いを行うとともに、エボラ出血熱の患者（疑い含む）・遺体・血液・嘔吐物・体液に直接接触しないようにすることが重要です。

<出席した皆様との情報交換・意見交換>

(当日出席できなかった方からの情報提供等を含む)

1. 体感治安について

(1) マルセイユに比べるとトゥールーズは格段に治安が良いように感じられるが、それは凶悪犯事件の発生可能性に限ったことで、トゥールーズ周辺でも泥棒被害は日々発生しており注意が必要である。

(2) 北アフリカ系やイスラム系の住民が悪いという訳ではないが、これら住民の人口が増えているのは事実であり、それに関連してか街を歩いていて「何となく怖い」、「このエリアは近づかない方がよい」と思う地区が以前より増えた。

(3) 具体的に「近寄りたくないエリア」は、郊外だとバガテル、ミライユ、ルネリーなどのガロンヌ川を越えた地区や、地下鉄の Canal du Midi 駅より西側のエリア、中心街だとマタビオ駅からキャピトルに至る裏通り等が挙げられる。

主要な駅で降り、近道しながら街の中心に向かって歩いている観光客が裏道で犯罪被害に遭うというのは、トゥールーズに限らず典型的な観光客の被害パターンといえる。

これらのエリアに住んでいる方が犯罪被害に遭うという話はあまり聞かない。これは、その地域に馴染んでいるため犯罪者に狙われにくいのか、気を付けるべきことを理解して暮らしているからだと思う。

(4) 道ばたで小銭を恵んでもらう可哀想な風情の人達がいるが、あの行為を組織的に行っている団体もいることを知り、訝しく思っている。ある日の朝方、市の中心街に小型のバンが止まり中から不法滞在者風の老若男女が15名ほど出てきた。そして彼らはリーダーとおぼしき男から小銭受領用のコップを受け取り、持ち場へと散っていったのである。

(5) 警察官の人数は限られており、彼らの殆どがテロ対策や重大事件の対処に当たっていると思われるが、そのツケが回る形なのか、泥棒事件が蔑ろにされることが多い。盗まれた自転車が出回る市場なども存在しており、警察当局もこれを把握している筈だが同所に対する摘発等を行われておらず、自転車泥棒は今も後を絶たない。

2. 犯罪被害事例

(1) 自宅アパート侵入未遂事案 (器物損壊被害)

ある日アパートに帰ってみると、出入口の鍵穴に何かを入れてこじ開けようとした形跡があった。不幸中の幸いで、アパート内へは侵入できなかったようである。

(2) 住居の不法占拠事案

オーナーが遠隔地にいるアパートや邸宅に浮浪者が入り浸り、遂には同所に住み着く事案が発生している。フランスでは、不法占拠であっても48時間経過すると強制的に退去させることができない(法手続を要する)ので、別荘を所有する人や自宅を長期間不在にする人は面倒な事態に巻き込まれないよう物件管理に気を配る必要がある。

(3) 白昼堂々の車上狙い

昼間に通りを歩いていたところ、路上駐車してある車の窓ガラスを割って車内の物を物色している男の姿を見掛けた。私は怖かったのですぐにその場を立ち去ったが、当時目撃者は他にも大勢いたと思われ、私はこの出来事から昼間でも決して安全ではないことや、犯罪者は人目を気にしないということ、そして警察もコソ泥程度の犯罪では迅速に対応してくれないということを知った。

3. 防犯対策

(1) 侵入強盗被害対策

アパート居住の場合、一戸建居住よりセキュリティがしっかりしていることが多いが、帰宅時には注意が必要である。物陰に隠れた暴漢が入口ドアの開く瞬間を狙っているかもしれない。こうやって暴漢の侵入を許してしまった場合、助けを呼ぶことは一戸建居住の場合より難しくなるため、帰宅して鍵を開ける際は、一度周囲の様子を振り返る等気を付けるべきである。

(2) 今は一戸建家屋用のセキュリティグッズが充実し、またお金さえあれば警備会社との個別契約等もできる時代だが、空き巣対策で一番効果的なのは「近所ぐるみでの防犯活動」であろう。泥棒は人の視線を嫌がるので、近隣家庭と人間関係を醸成した上で、不在時の「目配り」をお願いするのが良い。郵便受けをこまめに整理してもらうことも大切。

4. 総領事館と在留邦人の皆様との連携について

(1) 総領事館（以下、「総」）：在留邦人数の把握について。

最近の在留届データによると、トゥールーズはマルセイユを超えて南仏で2番目に在留邦人数の多い街となった（1位はニース）。しかし、在留届を提出せずに長期滞在している邦人学生がまだ相当数いるとみられる。総領事館では、在留届データによって邦人情報を把握するより他ない（各種邦人援護案件により未把握邦人の存在に気付くこともあるが）。皆様におかれては、邦人コミュニティ内で在留届を提出するよう働き掛けて頂けると大変ありがたい。

在留邦人（以下、「在」）：了解した。総領事館側は、併せて今後の情報提供媒体を再検討しては如何か。今の学生はメールチェックをしないことが多い。ラインやフェイスブック等、もっと気軽に情報提供できるツールを導入しては如何か。

総：フェイスブックについては既に運用しているので、今後更に有効な活用方法を模索したい。ライン等については、個人情報保護等の観点から慎重な対応が必要と思われる。

(2) 総：観光客に対する情報提供について。

フランスが日本に比べて必ずしも安全ではないことを、何とかして仏渡航者に事前に知らせてあげたい。そうすることでレストランでの置き引き被害等の「ちょっと気を付けるだけで避けられる被害」を防ぐことができると思う。当館でもHPで注意喚起し、外務省も日本で各種広報をしているところだが、残念ながら被害者の中にこれら広報を事前に把握している方はあまりおらず、有

効な広報手段を模索中である。

皆様におかれては、家族・友人が当地に来る際には事前に注意喚起して頂きたい。

在：日本にあるフランス大使館や総領事館で注意喚起してくれば、ビザ申請に行った邦人は防犯意識を高められる。

総：短期旅行者は対象とならないが、非常に良いアイデアだと思う。引き続き皆様のご協力とお知恵を拝借したい。